

アーバン・フリンジにおける風致林計画

——京都市双ヶ丘を事例として——

吉田鐵也・川村 誠・加藤博之・海老沢秀夫

Amenity forest planning on urban fringe
—Case study of Narabigaoka Hill in Kyoto—

Tetsuya YOSHIDA・Makoto KAWAMURA
Hiroyuki KATO・Hideo EBISAWA

要 旨

本報告は大都市圏のアーバン・フリンジに立地する森林について、京都市双ヶ丘を事例として調査・計画したものである。無秩序な都市スプロールの結果として、山地は見離され荒廃化が進んでいる。それを再生する手段は容易でない。然し一方で、風土的かつ自然的アメニティ基盤としての周辺山林に対する都市サイドからのニーズは極めて高いものがある。双ヶ丘の場合は特にそうした意識の高まりもあって都市風致林としての位置付けが前提にされてきたといつてよい。

調査編において、「歴史環境」では奥行と豊かさが述べられ、「自然環境」では都市近郊林の土壌立地と植生の貧弱さが明らかにされた。「景観・社会環境」では双ヶ丘の可視圏の特性さらに眺望景観の質が述べられ、次に周辺社会との関わりについて述べられている。

計画編ではアカマツ林を風致林の軸として設定し、市街地との緩衝帯として疎生林帯を計画した。又現植生を踏まえて風致施業区が設定された。施設は山内の文化財の鑑賞や緑地的機能の補完を目的に動線を中心に計画されている。

は じ め に

都市市街地の外縁部の森林については、これ迄も「都市林」¹⁾ 或いは「都市周辺林」²⁾ といった表現で考察されてきた。「都市林」はドイツのシュタットヴァルトを語原とし、都市近郊の大規模な森林をそのレクリエーション機能に重点をおいて考察するものである。他方「都市周辺林」は日本の都市における地理的条件を前提に都市自治体の外周部を構成する山地林を対象とし、都市サイドからのニーズを主眼に森林の総体的考察のために用いられている。本報告では、日本の大都市生活圏で地形立地から必然的に生じる都市スプロールの前線での森林の問題に限定する意味から「アーバン・フリンジの森林」とした。

アーバン・フリンジの森林は都市化の前段においては、農村の里山として経営され、アカマツ林を初めとする二次林が育成されてきたが、都市化と共に農家の生活基盤が変容して放置されるに至る。一方都市スプロールは農村集落をのみ込む形で拡大し、農耕地や林地を蚕食する。こうした市街地に接する山地は不断に様々の無秩序な人為の干渉を受けることになり、放置されればそれだけ荒廃していくことになる。再生のための人為を通じての秩序ある森林の回復が望まれ、

そのための条件整備が必要である。都市アメニティの観点からいえば、山地林の整備は最も基礎的要件といえる。

アーバン・フリンジの森林を考えるにあたって留意すべき点は以下の様である。

1) 歴史的風土性

里山としての経営の蓄積に対する正当な評価。里山をめぐる文化史的評価。

2) 自然的立地性

植生現況と将来の人為的影響予測から見込まれる育成可能な植栽。適切な管理の可能性。

3) 周辺都市環境

住民の関わり状況や意識の動向。景観の性格や評価。

本報告では京都市の双ヶ丘をとりあげ上記の3点から調査した。双ヶ丘は早くに名勝指定を受け又風致地区の規制もあったが、昭和40年代後半の住民運動を通じて土地公有化が進められ、風致林としての方向付けが与えられた。そうした意味では歴史風土条件が前面に出され、公園的位置付けが前提されていたといっても過言ではない。

1. 計画前提条件の検討

1-1 歴史的環境

1960年代以後の市街地化の進展は、今や双ヶ丘を包み込もうとするに至っている。しわし、京都における双ヶ丘の位置は、平安京造営（AD794）以来、市街地をとり囲む周辺部の一角としてあったと言える。双ヶ丘の歴史環境を吟味することは、とりもおさず京都の都市周辺部の歴史を明らかにすることに他ならない。都市周辺部とくに市街地に近接するアーバン・フリンジの歴史は、都市の展開と密接な関係を持っている。我々がここで問題とすべきは、双ヶ丘が京都の都市としての展開過程とどのように関りあって来たのかという点である。

1-1-1 平安京造営から仁和寺創建まで

まず最初に、平安京造営にあたって双ヶ丘がいかなる位置付けを与えられたのかを見ておきたい。平安京の京城が何を基準として設定されたのかは未だ明らかでない。賀茂川の流路についても、東へ付け替えられたものとする説が普及している³⁾⁴⁾。しかし、京城の北の基準を舟岡山にとり西を双ヶ丘とすれば、東を加茂川・高野川合流点以南の現在の河道に求めることも出来る。さらに推則を一步深めて、足利氏の説に依り⁵⁾、京城を成す市街地の地割部分と、舟岡山、双ヶ丘、および加茂川との間にアーバン・フリンジとしての荒地の設定を認めることも出来よう。我々は、アーバン・フリンジの概念をより広く考え、舟岡山や双ヶ丘さらには、神楽岡（吉田山）をも含めてとらえてみたい。

さて、平安時代におけるアーバン・フリンジとしての双ヶ丘は、第一に葬送の地であった。一の丘の古墳や二の丘、三の丘の群集墳に見られるように、古墳時代から墳墓の地として利用されていた。京城内での死穢を厭う王朝人は、葬送の地として京城周辺をあてたのである。加茂川河原をはじめ、舟岡山、神楽岡（吉田山）一帯さらに、京都盆地周辺の山麓一帯が含まれる。また、京都盆地を望む丘陵の山頂部には岩磐が認められ、神の磐座として信仰の対象となっていたことが考えられる⁶⁾。総じて、宗教的な場として王朝人により意義付けられていたと言える。

一方、双ヶ丘は、王朝人の別業の地、すなわち遊興の場として休養的な利用にも供されていた。仁和寺建立以前には、清原夏野の別荘が営まれていたとの記録があり、この地への天皇行幸は830年から847年の20年間に少くとも5回の記事を認めることが出来る⁷⁾。

以上のような王朝人ゆかりの地に平安仏教寺院が建立される。仁和寺もアーバン・フリンジに

立地した寺院の一つである。仁和寺の建立は889年（仁和4年）とされており、真言密教の門跡寺院として発展する。寺域は、現在の御室一帯にまたがり、南端は双ヶ丘の三の丘の南、下立売通りに至った⁹⁾。以後、双ヶ丘は仁和寺の寺領となる。

次に、平安京の市街地形成の実態と双ヶ丘の関係を見てみたい。平安京は、左京を中心に発展し、右京は湿地が多く、早くから田畑あるいは荒廃地となった。造営された京域は次第に縮少し、平安時代末期には上京・下京の2地域に集住した都市構造となる⁹⁾。しかし、都市の性格から見れば、古代的な専制国家の政治都市から、商工業中心の都市へと変容したのであり、かつての貢納による経済から商工業を中心とする都市経済の成立を見たのである。周辺部との関係を見ると、近郊農地および周辺山地と京都との間に、相互に依存し合う都市・農村構造が形成されたと言える。

この結果、双ヶ丘と京都との地理的距離は拡大し、双ヶ丘は近郊農村に位置することになった。しかし、文化史的な観点から見れば、双ヶ丘と京都は、仁和寺を媒介とした結びつきが続くのである。

1-1-2 中世的世界の展開

兼好法師が双ヶ丘に居住したとされる14世紀前半は、貴族社会から武家社会への転換期であった。宗教界においても、禅宗が武家政権の庇護により力を広げる一方、旧来の平安仏教の力が衰えた時期であった。「徒然草」には、双ヶ丘がモチーフとして使われており、仁和寺僧侶の生活が揶揄をこめて評論されている¹⁰⁾。市街地と相対的に距離を保った双ヶ丘の麓に居住することが、都市生活から一線を画することの象徴とされた。言いかえると、中世における世俗の世界すなわち有縁の世界から離れて、無縁の世界へと身を置いたのである。その結果現世を相対化する視座を獲得したのであり、新しい中世文学を生んだのである。また、現代人にとっては、中世隠遁者の文学を介して、松林あるいは松風をモチーフに、兼好や頓阿の名に寄せて双ヶ丘をイメージすることになった。

この双ヶ丘に代表されるように、中世のアーバン・フリンジは、世俗権力や経済関係に組み込まれた有縁の世界と、それらと相対的に独立した聖域としての無縁の世界との接点に位置していたのである。

1-1-3 近世寺院領としての双ヶ丘

仁和寺は、応仁の乱の兵火により伽藍をことごとく焼失し、双ヶ丘山麓の一寺院として細々と法灯を守っていた。同じく兵火にあった妙心寺や竜安寺といった禅寺の復興が早かったのに比べ、仁和寺再興は遅れ、江戸幕藩体制が整った1644（正保元）年であった。双ヶ丘から衣笠山にかけての御室一帯には、仁和寺をはじめ、妙心寺、竜安寺および法金剛院といった寺院とその門前町が形成される。仁和寺は境内68 ha 以外に、寺領12ヶ村および双ヶ丘を含む寺林10ヶ所が認められた¹¹⁾。寺院経済の安定とともに、双ヶ丘は地元村落にとって薪草や用材の採集の場ともなり、寺側も労力奉仕とひきかえに利用を認めていたと言われている。

近世期に注目すべき事は、御室一帯が、かつての王朝人の僧侶のみの休養地から、一般庶民の都市住民にとっても文化的な活動の場となったことであろう。京都の都市としての成熟にともない、季節的な行事や遊興が盛んになり、とくに御室仁和寺の花見は盛んであった¹²⁾¹³⁾。また、野々村仁清や乾山による陶器の窯が設けられ、美術史上も重要な活動が展開された。さらに、都市と結びついた産業として、仁和寺坊官による綴織が発達し、また、造園植木職が生れたのである。

1-1-4 明治以後の双ヶ丘

明治政府の時代となり、都としての役割りも東京へ移る一方、京都は近代都市への脱皮を図った。明治中期より市街地周辺の農村に近代工場が立地し、都市の外延的拡大が始まる。しかし、

仁和寺は、排仏毀釈の動きと、1869（明治2）年の寺領上地令により、社会経済的に大きな打撃を受ける。明治末期に至り、上地した領地の一部（双ヶ丘を含む）は仁和寺に払い下げられたものの、塔頭の数は減少し、門前町も寂れて寺林の管理も不行届きとなる。

明治以後、京都の市街化に注目すれば、時期的に2つの波を認めることが出来る。第1の波は、大正年間から昭和初期である。都市サラリーマン層の増加は、新しい居住地の開発と、余暇活動の場づくりを促し、郊外電車の発達をもたらした。1925（大正14）年には嵐山電車の北野線が開設され、1929（昭和4）年には、嵐山・清滝線および清滝・愛宕ケーブルが開かれる。この時期は、双ヶ丘周辺の旧門前町を中心に宅地化したに止まった。第2の波は戦後、1960年代の高度経済成長期における宅地開発である。第2の波により、農村地帯をアーバン・フリンジとしていた京都の都市構造は大きく変化し、今や、周辺山地をアーバン・フリンジとするに至った。双ヶ丘とその近辺は、各種の土地利用が混在し、土地利用の競合と“混雑現象”を呈している。こうした中で、双ヶ丘の3つの丘は、歴史的景観を維持するために、林地としての保全が図られ、二の丘と三の丘の京都市買上げに至るのである。

1-2 自然環境

双ヶ丘は、京都市街西部の沖積平野上にあり、南北に700m、東西に最も広い箇所では400m 足らずの、3つの明瞭に区別しうる丘陵から成る山塊である。標高は一ノ丘が最も高く、116m あり、二ノ丘、三ノ丘と漸次、高さを減ずる。地質は古生層から成り、いわば残丘状を呈しており、頂上部では未風化母岩が露出するところもみられる。この双ヶ丘の自然環境を、そこに成立している植生を中心にとらえてみた場合、最もよく印象づけられるのは、いわゆる里山としての双ヶ丘の存在であろう。灌木によるシバ、マツの落葉など主に燃料として、あるいは周辺農地への利用など、その存在は周辺農山村の生活に緊密に結びついたものであったろうと想像される。こうした事や、洛中洛外図などに描写される山陵の様子などから判断する限り、双ヶ丘を含めた京都市周辺の里山を長年にわたって形成していた植生は、いわゆるアカマツ林であった。しかし、近年に至って、こうした形態の里山は各地でその姿を変貌させてきた。これは、一つには、燃料革命や農業近代化などにより、周辺住民の里山への関わり方が薄らいだため、アカマツ林の生態遷移が進行し始めたこと、さらに、従来、主要構成樹木であったアカマツが、マツノザイセンチュウによるマツ枯れのために大量枯死する事態が発生したことなどである。こうした事実は双ヶ丘にあっても、同様な影響を少なからず与えていると考えられる。この間の双ヶ丘の林相の変遷を、少ないながらも残されている空中写真を基にして追ってみると、昭和23年のものでは、一ノ丘の大部分と二ノ丘、三ノ丘の頂上部はアカマツ林となっているが、これ以外の山裾から山腹のかなり上部にかけては、大きく畑地が広がっており、特に南部の二ノ丘、三ノ丘の周辺ではこれらの農道と思われる小道が縦横に錯綜しているのが観察される。林相はかなり疎林のようであり、ここからもこの時期の里山の存在をある程度まで確認できる。さらに昭和30年後半から40年頃にかけての写真では、上記の畑地などは殆んど姿を消し、アカマツ林はこんもりした格好で双ヶ丘全体を覆うようになっている。従ってこの時期の里山としての双ヶ丘が変貌し始めた事実もここからうかがい知ることができる。また、昭和42～43年頃には、一ノ丘南方山腹に大きな山火事跡地をみることができる。この跡地は10年以上経過した今日でもアカマツ、広葉樹類の低木林で周囲の林相からは完全に遊離している。さらにこの頃から、二ノ丘、三ノ丘頂上部のヒノキ林分が目立ち始めてきている。昭和48年頃の写真では一ノ丘、二ノ丘頂上部から山腹にかけてはマツ枯れと思われる立枯れが観察される。これらのことから主として戦後の双ヶ丘の林相の変遷はいわゆる里山一般の変遷の範囲におよそあてはまるであろう。このような変化を踏まえたうえで、昭和50年撮影の空中写真を基にして、現地踏査結果と併せたうえで、双ヶ丘の林相の現況を図として

表わした（図-2）。ここでは9種の林相を区分したが、これによると過去的人為的干渉の影響の大きさを知ることができる。これらの区分のうちの主なものについて、現地に調査プロットをおいて植生調査をおこなった（図-1）。以下、これらの調査結果（表-1）に基づいて双ヶ丘の、植生を中心とした自然環境について述べる。

アカマツ林と区分された地域は主要上層構成種はアカマツで圧倒的に優先する場合が多いが、総じて他の落葉広葉樹が混生する。プロット13付近では樹高の大きいアカマツが成林しているが、いずれのプロットにおいても中下層には、ヤマウルシ、カクレミノ、モチツツジ、ヒサカキ、ソヨゴ、リョウブといった樹種が普遍的にみられる。アカマツ・落葉広葉樹低木林は前述の山火事跡地で、樹高は6mを超えるものは殆んどなく、多くは4~6m付近で叢を形成している。アカマツは部分的に優先する所もある

が、コナラ、クリ、ソヨゴ、リョウブなどもかなり多量に繁茂する。さらに下層にもヒサカキ、モチツツジが密に成立しているが、稜線上や踏跡に沿った箇所では低木類も少なくなり、表土が流亡して下層の未風化土壌が露出していたり、コシダの群落だけがみられるところも存在する。アカマツ・落葉広葉樹林と区分された区域は、いわゆる典型的なアカマツとコナラなどの混交林ではなく、特定のタイプの林が存在するわけではない。表-1に示すように、アカマツ、リョウブ、アカメガシワなどの出現頻度が高くなる程度で、コジイなど常緑広葉樹が混生する場合もある。この区域はかつて畑地として利用されていた箇所が殆んどであり、現在みられる樹種はこうした畑地が放棄された跡に侵入した種と農道に沿って残された樹木などが混生してできあがったものであろう。前者ではヤマウルシ、アカメガシワ、後者ではコジイ、ナナメノキ、アカマツなどの大径木がこれにあたと推測される。また、この区域では各地に畑地跡を示す段や踏跡がみられ、中層木が少なくなっている。一般に、下層にはネザサが優先している。つぎに、落葉広葉樹林は畑地跡も部分的に含まれるが、主としてコナラが優先し、小径木の林となっている。しか

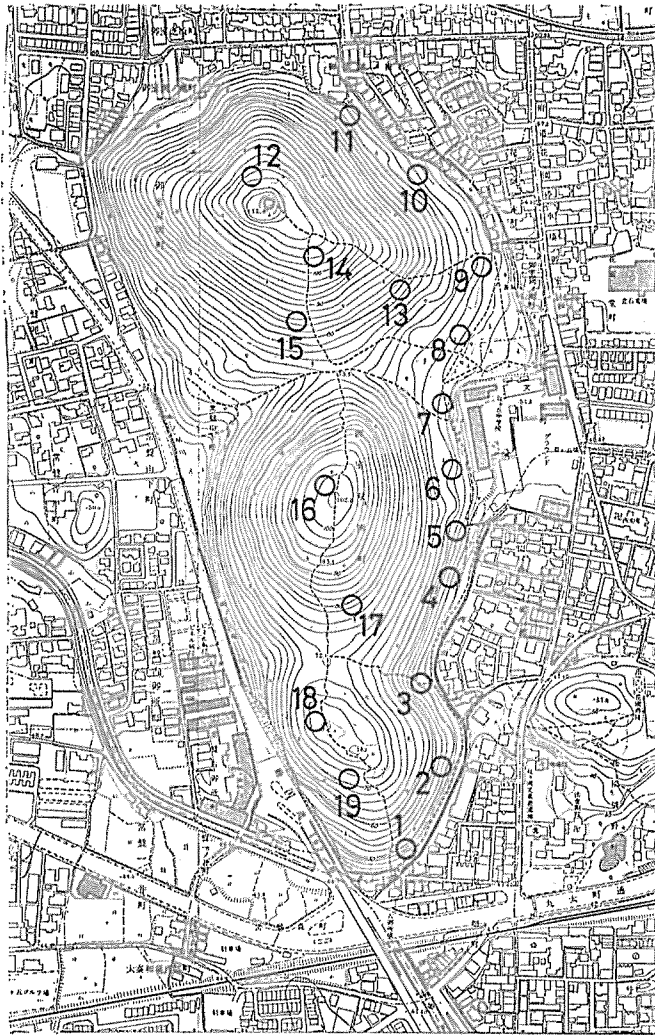


Fig. 1. Map showing a topography of Narabigaoka Hill and location of the sampled plots

し、所によっては、アカマツがマツ枯れのために消失し、ソゴヤリヨウブが優先してしまっている箇所も含まれる(プロット12)。ヒノキ林は、二ノ丘、三ノ丘の頂上部周辺に分布し、ヒノキが大部分で樹高が10mを超えるものが多いが、形質は悪い。樹冠はヒノキによって完全にうっ閉し、林内照度はかなり低い。従って、中下層に低木類、草本類は著しく少なくなっている。二ノ丘のアカマツ・ヒノキ林は、隣接するヒノキ林から飛来したヒノキ種子がアカマツと共に更新したもので、小径木の多い、かなり密度の高い林分となっている。上記の区分林相の他に双ヶ丘には、いずれも小面積であるが、スギ林、常緑広葉樹林、竹林などがみられる。以上の結果から双ヶ丘の現況植生はその構成上からアカマツが林内にある密度で成立している林分、およびアカマツがみられない林分に大別することができよう。

前者には、アカマツ林、アカマツ・落葉広葉樹低木林、アカマツ・ヒノキ林、アカマツ・常緑広葉樹林が含まれる。後者にはヒノキ林、常緑広葉樹林、竹林・スギ林などが含まれるが、後者は前者に比し、面積上からは狭い。一方、こうした林分の成立条件の一つである土壌の発達について、この双ヶ丘の特徴的側面となっているのは山裾部、特に畑地跡などでは一般にA層が厚く、土壌が深い、陵線部では表土が流亡してしまっていることが多く、未分解の落葉層が部分的に堆積することはあるものの、総じて、未風化母岩が浅くに分布したり、あるいは露出したりしていることである。このことから土壌環境としては林木の育成上は陵線部でやや瘠悪となっている。

1-3 景観と社会環境

1-3-1 双ヶ丘周辺の都市化

(1)戦前

双ヶ丘周辺の大部分は農業的土地利用(茶畑・竹林・水田等)に供されており、宅地は一の丘北麓(御室)及び東側妙心寺通沿い(花園)にみられるだけである。なおこの時期に双ヶ丘は史跡名勝の指定を受け、さらに周辺を含めて風致地区の指定がおこなわれる。

(2)戦後(昭和20年・30年代)

双ヶ丘東麓側(一ノ丘付近・二ノ丘付近・妙心寺南側)で宅地化が若干進行するが、西麓側は依然として農業的土地利用がなされている。

(3)戦後(昭和40年代)

周辺の宅地化が急激に進行する。東麓側の宅地化はほぼ限界にまで達し、宅地化の動きは西麓側にも波及する。これに対応して西側を流れる御室川が改修され、西麓沿いには周山街道へぬける道路が建設される。この時期、双ヶ丘を含む一帯が歴史的風土保存区域に指定される。

1-3-2 双ヶ丘の景観的位置

(1)双ヶ丘の可視圏

双ヶ丘が実際どれくらいの範囲においてみえているかを調査した(主要な道路の交叉点に立って双ヶ丘がみえるかみえないかをチェック。調査地点は双ヶ丘のごく周辺のみに限った)。結果

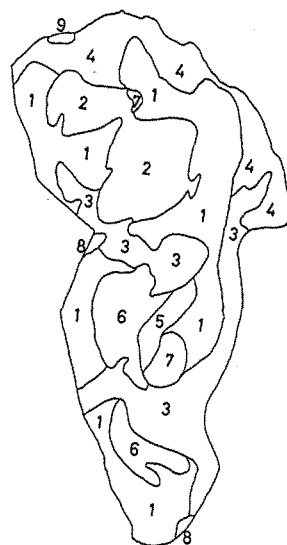


Fig. 2. Diagram of vegetation type in Narabigaoka Hill

- 1: アカマツ林
- 2: アカマツ・落葉広葉樹低木林
- 3: アカマツ・落葉広葉樹林
- 4: 落葉広葉樹林
- 5: アカマツ・ヒノキ林
- 6: ヒノキ林
- 7: 常緑広葉樹林
- 8: スギ林
- 9: 竹林

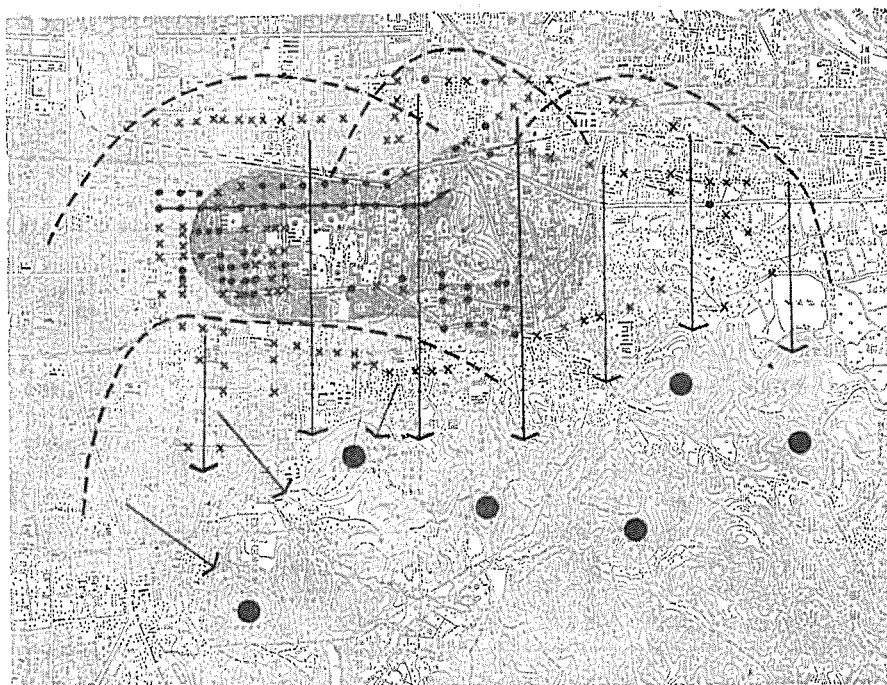


Fig. 3. Viewable area of Narabigaoka Hill

-  viewable area of Narabigaoka Hill
-  viewable area of other mountains
- view-point of Narabigaoka Hill (visible)
- x (invisible)

は図3に示す通りで、ごく限られた範囲でしか見えないことがわかった。双ヶ丘がみえるかみえないかは道路の構造、建物の高さ、道路の標高といった物理的条件によって左右されている。この点からすると戦前の双ヶ丘はより広い範囲からみることができたと思われる。

(2) 双ヶ丘のみえ方

上記調査地点のうち妙心寺通を例にとって双ヶ丘がどのようなみえ方をするかを調べた。結果は表2に示す通りで、双ヶ丘のごく一部（二ノ丘の陵線部に近い部分のみ）しかみえないことがわかった。

(3) 双ヶ丘からの眺望

景観的な意味で山をとらえた場合、眺められる景観としての山及び他の景観を眺める場としての山という二つのケースが考えられる。双ヶ丘について後者の点を検討してみる。

樹林の多い市街地内部の施設（例えば妙心寺など）及び主な山と、双ヶ丘（二ノ丘）との位置・高さの関係を図4に示した。近・中・遠距離景の距離指標としてそれぞれ360m以内、360m～6600m、6600m以上という数字を採用すると¹⁶⁾、妙心寺などの市街地内部の主要施設及び衣笠山、左大文字山、舟岡山などは中距離景領域に位置し、また東山、大文字山、比叡山、宝ヶ池などは遠距離景領域に属する。

一般的に見て中距離景は「一本一本の樹木のアウトライン」¹⁷⁾が判別でき、さらに「構成要素の互いに関係し合っている様」がわかる「最もランドスケープ的な形姿」を展開している領域で

Table 2. Visibility of Narabigaoka Hill from the view-points along the Myoshinji St.

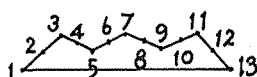
Point of view (No.)	Distance (1) (m)	Visible parts				Angle of elevation	Note (Height above the sea level)
		Ridge-line (2)	Side (3)	Figure of visible parts	Quantity (4)		
1	2050	6-7	A		1	●	
2	1900	6	A		0.5	●	
3	1750	6-7-8	A		2	●	2
4	1650				0		50.0
5	1500	6	A		0.5	●	
6	1410	5-6-7	A		2	●	
7	1330	5-6-7	A		2	●	
8	1230	6	A		0.5	●	
9	1100	6	A		0.5	●	
10	960	5-6-7	A-B		2	●	
11	830	6	A-B		0.5	●	
12	700	5-6-7	A-B		2	●	4
13	620	5-6-7	A-B		2	●	
14	430	4-5-6	A-B		2	●	
15	370	4-5	A-B		1	●	
16	300	3-4-5 8...12	A-B		6	●	12.5
17	200	4-5 6-7	A-B-C A		2.5	●	14

Note: (1) Distance from the center between Ni-no-oka and San-no-oka

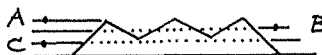
(2) See the following illustration

(3) "

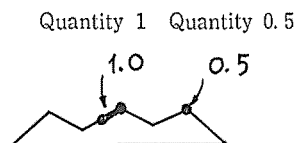
(4) "



Note(2)



Note(3)



Note(4)

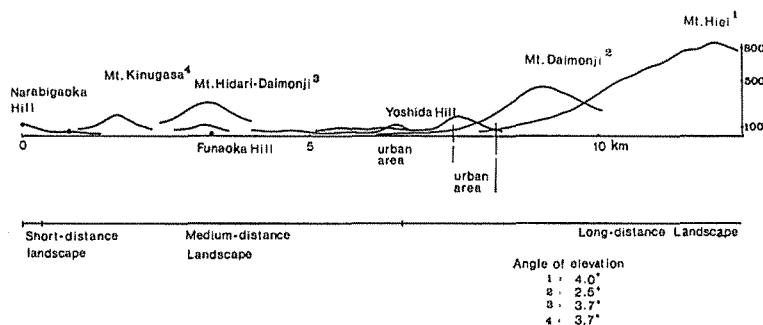


Fig. 4. The Views from Narabigaoka Hill

ある。一方、遠距離景は一本一本の樹木よりは「稜線などの地形のアウトラインや空を背景としたスカイラインがきわ立った視覚対象」となってくる。つまり、双ヶ丘の距離景観の特徴は、正しく「ランドスケープ的」とであると言える。

また、双ヶ丘からの眺望の他の特徴は、視界の広さである。双ヶ丘は市街地の西端に位置しているため、市街地及び東山などの周辺林の大部分を視野の中に収めることができる。なお、人間の正常な視覚範囲は、水平角で左右それぞれ 60° とされているが¹⁸⁾、この範囲内に眺望の主要部分は収まっている。

以上の点から、他の景観を眺める場としての双ヶ丘はきわめて好ましい位置にあると考えられる。さらに、双ヶ丘から見える主な山についてその仰角をみると、比叡山 4.0° 、右大文字山 2.5° 、衣笠山および左大文字山 3.7° という結果が得られ、いずれも低仰角の位置にあることがわかる。このような低仰角の景観は、手前のわずかな障害物によって遮切られるという性格を持っている。そのため、眺望の場としての双ヶ丘を良好な状態で保持するためには、開かれた展望所の確保と共に、双ヶ丘周辺に今後とも高い建物を存在させないという条件を必要とする。

1-3-3 周辺環境 (図-6 参照)

双ヶ丘周辺の土地利用をアクセスを中心として述べる。名勝双ヶ丘の境界を山麓線としその土地利用との関係から整理すれば以下の3つにまとめられる。

1) 道路

i) 幹線車道。国道162号線がそれで、断絶のない多量の交通量と騒音とで住宅街と山地は遮断される。

ii) 生活道路。アクセスは可能だが、駐車やゴミ投棄により荒廃化の先鋒となっている。

2) 建物

アクセスは全く不可能。農道(里道)は残存するが巾員狭く露地状に閉鎖的である。一部宅地裏側で山地の削り取りが行われ崖状になっている。

3) 河川。西ノ川沿いがそれで良好なアクセス条件となる。山裾の緩斜面は里道が通じ菜園が続いている。

さらに、山裾部分の条件は東部のみ10~20%の緩斜面が展開し、現況のレクリエーション利用もこの部分と稜線部に集中している。ただ、林床部が繁茂し、見通しの悪い所では利用されていない。従って、アクセスの点では、外部の道路状況は今後の課題とするとして、東側からのアクセスは整備によって可能となる。その際に、境界つまり外部との接点の処理とオープンな帯域の設定が必要となろう。

2. 計 画

計画の基本方針は先ず以下の3つの社会空間レベルで考える。

- 1) 双ヶ丘周辺地域レベル
 - 2) 京都市街地域レベル（とくに旧市街地）
 - 3) 日本全国レベル
- 1) 散策、眺望、休憩、鑑賞などの行為を通しての都市公園的機能の補充。近景・中景としての景観を通しての街区の秩序化や地域の自己同一化の拠点的功能。こうした内容がより豊かに増進することが計られる。
- 2) 市街地のランドマークとして、また盆地をとり囲む山地の骨格を支えるものとして、そのスカイラインのより鮮明化やテクスチュアをより対比化することが計られる。
- 3) 観光ツーリズムに対応して、周辺名所との観光レクリエーション・ネットワークの強化が計画される。

次に、風致林の育成においては、維持管理費用の枠内で可能な限り、歴史的イメージを重視してその再生をはかる。動線及び山地下部においては「やすらぎ」感を与えるために疎生林ないし散開林にする必要があろう。中腹から上部は密生林とする。

2-1 風致林と風致施業計画

上記の考えに基づいて、風致施業対象区域を、植栽、伐採など大きな手入れは実施しない区域、積極的なアカマツの植栽・保育施業を実施する区域、および、施設計画対象区域に大別する。このうち、第2の区域については、アカマツ林を双ヶ丘における風致林としての目標林型に設定し、アカマツの育成を積極的にすすめることとする。これらのアカマツ林育成施業を現林況にに応じて対処してゆくことを考えた場合、現林況の持つ構造によって、その施業形態は変化してゆかねばならないであろう。すなわち、アカマツ林として区分された区域のうち、現在、アカマツの密度が高く、且つ成林状況の良好と判断される箇所では、混生する広葉樹の除伐を中心にして、現存するアカマツの保育施業をおこなう（アカマツ天然林施業タイプ(ii), Eb）。一方、斜面上部のアカマツの生育がやや劣る部分では、前者同様に広葉樹等の除伐をおこなうと共に、部分的にアカマツの補植ないし、新たな植栽を実施する（アカマツ人工林タイプ(ii), Db）。つぎに、アカマツ・落葉広葉樹低木林では、アカマツの密度は非常に低いので、これ以外の樹木を雑木として除伐し、全面的にアカマツの植栽を実施する（アカマツ人工林施業タイプ(i), Da）。落葉広葉樹林は施設区域に属する部分が半分近くになること、北面の周辺人家に接する部分に分布することなどから、前述したように特に施業はおこなわないが、斜面上部では一部で除伐、アカマツの植栽をおこなう。アカマツ・ヒノキ林では、殆んどこの2つの樹種によって構成されているので、ヒノキを除伐対象樹種にして、アカマツの保育を図る（アカマツ天然林施業タイプ(iii), Ec）。アカマツ・落葉広葉樹林では、アカマツ林同様、アカマツの密度の高い部分は、これの保育を図り、他種広葉樹の除伐を実施する（アカマツ天然林施業タイプ(i), Ea）が、やはり尾根上に近い部分でアカマツの生育不良箇所では、除伐をおこなった後、アカマツの補植や新たな植栽を実施する。最後にヒノキ林および常緑広葉樹林は林相として安定していること、風致林内における部分的アクセントとして特別な手入れはおこなわない。これらを施業的にまとめると以下ようになる。

- 1) 当面、アカマツの植栽や伐採などは実施しない区域。
 - A ヒノキ施業区
 - B 常緑広葉樹林施業区
 - C 落葉広葉樹林施業区

2) アカマツの育成をおこなう区域

D 人工林施業区（アカマツの補植や新たな植栽をおこなう。）

—a タイプ(i)

—b タイプ(ii)

E 天然林施業区（アカマツ以外の樹種を対象に除伐をおこなう。）

—a タイプ(i)

—b タイプ(ii)

—c タイプ(iii)

以上を図示すると図5のとおりである。

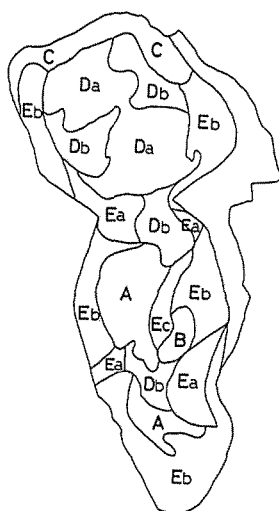


Fig. 5. Silvicultural system of amenity forest

2-2 利用と施設（図6参照）

A: ヒノキ林施業区

D: 人工林施業区

E: 天然林施業区

B: 常緑広葉樹林施業区

—a タイプ(i)

—a タイプ(i)

C: 落葉広葉樹林施業区

—b タイプ(ii)

—b タイプ(ii)

—c タイプ(iii)

現在利用されている歩道を基礎にして、斜面の傾斜及び

アクセスの面から東面の動線を重視する。同時に緑地機能を高めるために市街地との緩衝帯として疎生林にする。双ヶ丘の優れた眺望立地を生かすために稜線歩道をこれにあてる。一の丘古墳、三の丘群集墳といった双ヶ丘内の文化財と周辺名所、仁和寺・妙心寺・長泉院等をターミナルとつなぐ歩道ネットを考える。以上の方針で以下の整備計画をたてる。

2-2-1 動線

歩道幹線を A—F に設け、管理道を兼ねる。観光レクリエーションに対しては B, D, E のアクセスを整備し、案内施設を併設する。

歩道支線は既存の歩道の拡巾整備にとどめるが、歩道沿いの林床整備をしておく。稜線歩道は眺望景観確保のために除間伐と林床整備をする。

アクセスは A—G の7ヶ所あるが、駐車スペースを与えないよう階段を設ける。

2-2-2 修景植栽

東麓の畑地跡は緑地機能を高めるために花木を中心とした疎生林とし、林床植栽もしておく。境界を明示すると共に土取り、ゴミ投棄等を防ぐ意味からもネットを併用した生垣等を仕立てる必要がある。

2-2-3 広場

東麓中央部の緩斜面を利用し広場とする。畑地跡の崖は自然石の石積によって自然な感じを出したい。この丘の山頂部には展望露台を設け利用を促進する。

2-2-4 管理

管理棟を設け、日常的な巡視が当面必要となる。維持管理業務としては清掃と疎生林・散開林の林床手入れが定期的に必要である。それは防犯上また施設破壊に対する防止効果の上でも必要である。

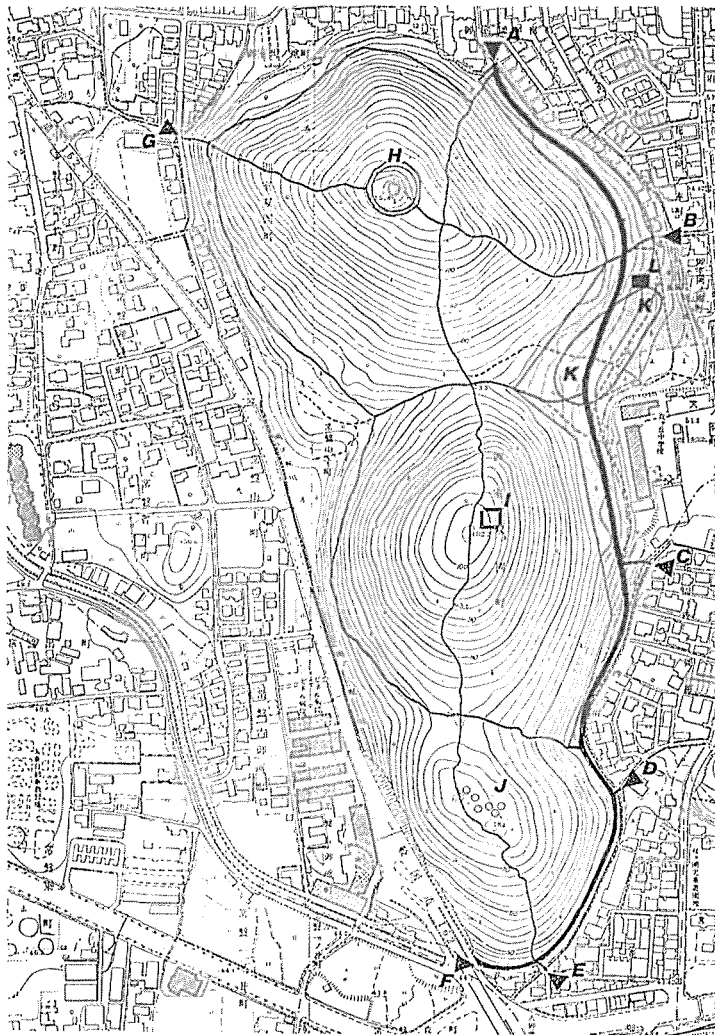


Fig. 6. Facility Area Planning

-  planted area for landscaping
 A ~ G access
 H · J old tomb
 I look-out platform
 K open area
 L superintendent's office
 ——— footpath

(註)

- 1) 高橋理喜男他，都市林の設計と管理，1977，所収
- 2) 中村一，川村誠他，呉市都市周辺林整備計画，1979，所収
- 3) 塚本常雄，京都市域の変遷と其地理学的考察，京都大学地理学教室編，地理論叢 I，1932，所収
- 4) 京都市編，京都の歴史 I，学芸書林，1970，p. 233
- 5) 足利建亮，都城の計画について，上田正昭編，都城，社会思想社，1976，所収
- 6) 京都市編，前掲書，p. 251

- 7) 西田直二郎, 洛西花園小史, 1949, p. 333
- 8) 高見寛応, 仁和寺要誌, 仁和寺, 1907, p. 3
- 9) 林屋辰三郎編, 史料京都の歴史 4, 平凡社, 1981, p. 6
- 10) 徒然草, 54段参照
- 11) 高見寛応, 前掲書, p. 16
- 12) 黒川道祐, 日次記事, 1676 (延宝 4) 年, 所収
- 13) 貝原益軒, 京城勝覧, 1718 (享保 3) 年, 所収
- 14) 西田直二郎, 前掲書, p. 173~174
- 15) 小野恵美子, 宇多野小史, 1979, p. 38
- 16) 樋口忠彦, 景観の構造, 1975, 所収
- 17) 樋口忠彦, 前掲書, 所収
- 18) 造園雑誌, Vol. 33, No. 2, 所収

参 考 文 献

- ・品田 穰, 都市の自然史, 1972
- ・品田 穰, ヒトと緑の空間, 1980
- ・武居二郎, 小椋純一, 京都市周辺林整備計画, 1980
- ・網野善彦, 無縁・公界・楽, 平凡社, 1978

Résumé

This paper describes a case of amenity forest planning on urban fringe on Kyoto.

First we mention natural condition, in which secondary vegetation has been evolved through human activities. Then, scenic views of forest, which have been established by specific urban cultures, are mentioned. It reflects the historical backgrounds. Thirdly we consider the structural character of Kyoto. The consideration reveals especially when urban growth has been caused by some socio-economic conditions.

In Japan urban fringe is located between urban district and forest land in many cases. Synchronically urban fringe is characterized by the coexistence of forest, farm, housing or road site and others. Diachronically the structure is unstable and changeable. On one hand, open space, such as farm and forest land, is changed into fragments and urbanized. It can be called intensive land use in an area. It causes competition and "confusion" of land use. On the other hand, devastated land increases with extensive use of forest and farmland, which has been produced by the decline of agricultural activity and the change of life style. It is extensive land use. It brings about some negative effects on conservation of scenic beauty and on prevention of disasters and crimes. This simultaneous process of the both land uses is the definite character of urban fringe.

A preceding condition of forest planning is an organic contact with the land uses which surround the forest. Land use planning, therefore, should be done ahead of forest planning. An ideal forest image appears in the process of the land use control.

Next come the treatment planning and the utility planning which are the central issues of forest planning. For the former, we consider a treatment methodology should be established according to each scenic viewpoints in the entire city. The latter plays an important role in connecting urban district with the forest areas and it is expected that this planning should lead people to act more significantly in the forest. Here forest should be considered

to function not only as a landscape but as a ground for amenity experience.

This report contains a case study of Narabigaoka Hill in Kyoto around where the urban fringe is typically Japanese. Urban growth in the 60's made the hillside of Narabigaoka a residential district. Although there was the claim for historic landscape protection, only limited open space of the hill could be conserved.

Since Heiankyo, the oldest city of Kyoto, was founded in the eighth century, the historical environment of Narabigaoka has been modified in accordance with the urban growth. Even today we Japanese project our historical image on Narabigaoka. We never fail to imagine the pine forest there, through a scene of the medieval literature. In Omuro area that includes Narabigaoka, the temples, founded before the middle ages, exist to this day. And this is familiar to the urbanites as a recreational or meditative space.

In natural environment of the hill, broad leaved trees are invading and pine trees regressing. One reason is that forest land use such as gathering wood for fuel or fire has become obsolete, and hence this makes regeneration condition worse. The other reason is the death of mature trees by insect damage. Artificial silvicultural condition for pine trees is neither good. On the ridgeline the topsoil has become thin, and bare land is seen in no small quantities.

Due to the spatial development of Kyoto, surroundings of Narabigaoka has become housing area, and agricultural land use is rarely seen. We conclude that the neighborhood community has hardly the facilities to use Narabigaoka. Now Narabigaoka is nothing more than a portion of urban landscape. Narabigaoka should be rearranged for a park to be connected with the community people.

In order to position Narabigaoka in the urban structure of Kyoto, landscape analysis is effective. We analyzed the visibility of Narabigaoka Hill from Kyoto, and the view of Kyoto from the hill. As a result we found that the forest landscape of the hill itself is meaningful only in the short distance, when we make an amenity forest planning.

Here we can propose two planning strategies. (1) Silviculture planning of amenity forest consisting mainly of pine trees. (2) Park facilities design to make Narabigaoka connected with urban district.